

東彼杵 ダラフ

15/23郷 三根郷

新茶が出回り夏も近づく東彼杵町。
奥が深かった番神山の山登りと、
そのぎ茶にまつわるエトセトラ。
ものづくりの現場は熱かった。

＼ 真っ赤に焼いて打つ、包丁作りに精を出す森保憲さん

城 址 を 探 し て 尾 根 歩 き

まずは、小学生でも気軽に登れるという番神山の頂上を目指した。妙法寺の門をくぐり、杉林の中を登るとすぐに白山神社の案内板がある。「ここだよ〜！」と堀越隊員に呼び止められ振り返ると、ハリウッドのチャイニーズシアターできるように手を当てている。悪さばかりしていた鬼の手形と同サイズで爆笑する。

40分ほどで妙法寺の守護神堂に到着し、大村湾と町並みの絶景を満喫できた。下山して地区の人たちに話を聞いていると、守護神堂の先があり、そこが松岳城址と知る。番神山のふもとに住む松岳幸子さんは、「うちが松岳城と関係あるはずだからと、前に先生をされていた方から資料を譲り受けました。この写真のような古い石垣が残っていますよ」とのこと。

すでに膝は笑っていたが再び現場へ。お気軽登山が一転、無言でひたすら登山。鬼の笑いもなく素通りしていた。

守護神堂の先を数分も歩けば石垣が見えてきた。資料には、戦国時代に大村氏により築城され、石垣の特徴からは文禄・慶長の役（1592～1598年）に際して修築された可能性が強いとある。また、大村氏と後藤氏が幾度となく争奪戦を繰り広げた歴史の舞台だったとか。登っておいてよかった。ここが番神山の山頂とわかり、なおさらである。

上から 約束した石段を作れず鬼が悔しくて叩いたという手形
松岳城址の資料を探して、見せてくれた松岳幸子さん
資料には石垣や虎口など遺構をまとめた写真ファイルも
ここに松岳城があったことを物語る高さ4～5mの石垣



産毛が映える 旬のそのぎ茶

国道で新茶ののぼりを見つけた。「どーぞどーぞ。今は一段落といった感じね」と長崎緑茶販売の小林濱雄さん。お茶の最盛期を迎えた東彼杵町。茶商の小林さんは農家が作った荒茶を加工し、独自のお茶に仕上げ、卸売りや小売りするのがひとつの仕事。この時期は新茶まつりや茶市、陶器市など町内外の催事も集中するので、とてつもなく忙しい。とわかっていながら、“まんじゅうあります”の看板が決め手になった。

「こいはいかかわかるかね」。注がれたお茶は少し毛羽立ったような感じに見える。「ホコリじゃなかぞ。産毛さ。新茶にはこいがある。赤ちゃんに産毛があるのと一緒たい。どこかで新茶と言って出された時は確認してみい」と教えてくれる。今はお茶処で暮らしているので、他所で話せるお茶知識を得られるとうれしい。

三根郷にはかつて県の茶業支場があり（現在は中尾郷に移転し、茶業研究室に改称）、濱雄さんの父もそこに通っていた。「お茶は飲むだけでなくこれからは食べんば」が父の口癖だったそうで、濱雄さんはその教えを守り、うどんやソフトクリームに上質なお茶を惜しみなく入れて、数々の商品を生み出した。

今も人気の商品がそのぎ茶まんじゅう。「お茶まんじゅうはどこにもあるけどほとんどが色つけやもんね。こいはお茶の粉末を入れた自然の色」とこだわった。生地と白あんにお茶をたっぷり練り込んだ、甘さ控えめのまんじゅうはそのぎ茶のお供によく合う。

濱雄さんはそのぎ茶をブランド化して表に出した人物のひとり。そのぎ茶にまつわる話は面白く、それもまたお茶請けに最高だった。



上 湯呑みに浮かぶ産毛はいいお茶ができた証。茶舗で飲むと格別の美味しさ

下左 そのぎ茶を各地の催事に出店してPRし、新しい商品も開発した小林濱雄さん

下右 手作りのそのぎ茶まんじゅうは1個74円。新茶と一緒に味わいたい

頼りになる 町の鍛冶屋さん

今度は鉄を打つ音に誘われる。森かじやの中へ入ると、東京の下町などでよく見かけた町工場という雰囲気が出て懐かしい。作業が落ち着いた頃に、2代目の森保憲さんが時間を作ってくれた。炎の前とはガラッと変わったやさしい顔にほっとする。

「親父が嬉野の塩田へ丁稚して、その後に波佐見で3年ぐらい。そいでここに工場ば構えた。うちは包丁屋というより加工屋。お客さんの注文、要望に応じて作っている。こいでどうだ！と並べて売れるもんじゃなかし」

ほとんどの農器具はオーダーメイドだと知って驚いた。ほかにもクジラやイノシシ解体用の包丁、桁網漁の鉄爪、ボラ突きの鉾などが次々と出てくる。もちろん家庭用の包丁も。「こいはうちの宝」と茶色くなったノートには昔からの顧客データがぎっしりと、図入りで書かれていた。

「見とくぶんには面白かけんね。こっちは火傷だらけよ（笑）」と森さん。赤く燃えた鉄と鋼を手打ちし、魂を吹き込んでいく姿はカッコいい。小学生が1人で来て、1時間ぐらい黙って見て帰ることもあるそうだ。1つ1つ丁寧に作られた刃物はどれも武骨な感じがして男心をくすぐる。

農期だけに修理の鋏や鎌なども順番待ちで並べられていた。町の農業を支える鍛冶屋から、小気味よい音がしばらく鳴り響く。



＼ 包丁になるまでの工程を、並べて説明してくれた



＼ 中には長さを尺で指定した古いデータもあった

＼ 「楔を作ってみませんか？」と言われて特別に体験



三根郷へは、町営バス「JA 東そのぎ支店」「江頭」「一本松」「木戸蔵」「上杉」、JR 九州バス「江頭」「妙法寺前」「山田口」「樋口」のいずれかのバス停を利用。

次回は千綿宿郷。
お楽しみに！